

〔研究ノート〕

与謝蕪村について—白文方印「潑墨生痕」—

画家や書家が、自分の姓名や字号とは別に、自分の好む字句を印章にしたものを遊印と言いますが、蕪村には、私が知り得た限りで、五種類の遊印があります。その数は、同時代の池大雅などに比べると、非常に少ないと言えます。しかも、その中の四つは、初期から中期にかけての作品に、時どき捺されているだけであり、残る一つの「潑墨生痕」という印のみが、中期から晩年にかけて、度たび用いられるのです。と言うことは、蕪村が好んで用いた遊印は、「潑墨生痕」という印、ただ一つだったと言って差支えないでしょう。

蕪村がこれほど好んだ「潑墨生痕」という言葉の出所が、私にはなかなか判らず、蕪村が自分で作った言葉ではないかと考えていたのですが、とある機会に見ることを得た画によって、この蕪村愛用の印の出所を知ることが出来たのです。その画とは、雪景の淵に漁師の家族をのせた屋形舟が浮かぶ図柄の画で、画中に「古木短篷」という題と「霞狂陳汝文画」という落款があり、その下に「陳霞狂印」（朱文円印）と共に、正に白

文長方印「潑墨生痕」が捺してあるのです。蕪村はこの陳汝文の遊印を見たに違いありません。と言いますのは、蕪村は「誰々に倣う」と款した画を数多く残しているのですが、その中で「陳霞狂に倣う」とした画を三点も描いているからです。但し、その三点を見ますと、その図柄がこの「古木短篷図」と異なっていますので、蕪村がこの画を見たかどうかは判りません。ここで推測できることは、蕪村が倣った陳汝文の画に同じ「潑墨生痕」の印があったに違いないということです。

この陳汝文という画家は、中国の画史には全く出てこない人物なのですが、不思議なことに、日本人の手になる中国画史の中には出てくるのです。それは、彭城百川(1698～1753)の『元明清書画人名録』という本であり、その中の明の項に、「陳汝文 号霞狂 人物山水」とのみ記されています。「古木短篷図」の雪をかぶった山肌や古木の描法からしますと、この画家は浙派の流れに属するものと思われまふ。江戸時代には、中国では名もない画家の画が、日本に渡って日本で有名になるということがしばしばあったようです。陳汝文という画家もその一人でしょう。

画を論ずることの少かった蕪村にあつて、彼が画を描く際に最も好んだ「潑墨生痕」という語句の意味を想像することは、たいへん興味深いことではないでしょうか。ここで、私なりの一応の解釈を試みますと、「潑墨」とは、水墨画の描法をさすのではなく、墨色の出具合、延いては画の出来不出来といったことを意味する、と考えた方がよいように思われます。そして「生痕」とは、生活の跡、生きた証(あかし)ということでしょう。つまり、絵画の裡に生きた証を描きこむ、ということではないでしょうか。

(早川聞多)



絹本墨画淡彩 122.5×66.8センチ
古木短篷図 陳汝文筆

季刊 美のたより No.56

昭和56年 8月27日

発行 大和文華館